

## 服薬と患者の性格

医者というのは、「患者さんは、当然、処方された薬を毎日きちんと飲んでくれているはず」と思い込んでいる。だが、現実はずな甘くない。

56歳のDさん。高血圧症と高脂血症と脂肪肝、高尿酸血症と生活習慣病の病名がいくつも並びツツモノだ。動脈硬化の進行と脳梗塞が心配な患者さんである。で、最初からずっと、顔を見るたびに、禁酒と禁煙を勧めてきた。だが、守られた様子はな。いや、試みた気配もない。せめて血圧の薬だけでも飲んでくればよいのだが、今日も血圧は高い。薬は、すでに1週間くらい前からなくなっているはずである。

もちろん何度も、「これでは治療にならない。きちんと薬を飲み続けてくれないと困る」と、お願いをしたものだ。「このままでは責任を持ってない。他の医者に診てもらいますか」などと言いかけたこともある。悲しそうな眼を返されて、「じゃあ、医者が悪い。自分の指示に従わせたいだけ」の一種のドクハラだ」と反省もした。

Dさんは、身体が大きくて見かけは怖そうだが、悪い人でもずるい人でもない。薬をきちんと飲めないことや生活習慣の改善

ができないのは、まずは、大雑把でルーズな性格が関係しているからかもしれない。

ま、性格のせいなら、仕方がない。「三つ子の魂百までも」という。生まれ持った性格というのは変わらないものだ。医者には、患者さんの性格や行動の変更を強いる権利も義務もない。できることといえば、考え方や生活習慣の間違いに気づいてもらおうと頑張らうだ。

ということで、ワッシーは今日も、「決まり事をきちんと守るひとのほうが健康で長生きする」などと言って。Dさんに煙たがられている。それは、煙らぬお節介をしたがる性格のせいかな。そうなのだ。さっさとさっさと変わらな。

(石黒修三「いこへるクリニック」・脳神経

外科医…10/24 北國新聞掲載)